

## ◇ 国 語

国 3-1～国 3-14 まで 14 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

生活をかんがえるにあたって、われわれはしばしば、衣・食・住、という三分法をつかう。たしかに、この三つは、生活者としての人間経験をふるいわけるときの大きな三つの領域になるだろう。世界にはさまざまな社会があり、さまざまな人間が生活を展開しているけれども、この三つの領域は、どんな社会でも、<sup>A</sup>ゲンゼンと存在している。

しかし、これらの生活領域のそれぞれにどのような意味づけをあたえ、どんな構造を想定しているか、は、「文化」の問題だ。ひとくちに「衣」といっても、着ることがもっている意味は文化によってそれぞれにちがうし、また、生活ぜんたいのなかで衣生活が占めている役割も文化がことなるにしたがつて、ちがう。

たとえば、あるフランスの社会学者の観察によれば、イギリス文化は「食べる」ことをひとつの「事務」としてかなり **ア** に扱う文化である。イギリス人にとって、「食べる」ということは、生存上必要なことにはちがいないが、要するに、一定のカロリーと栄養とがからだのなかにセツシュ<sup>B</sup>されればよい、というそれだけのことにすぎないというのだ。そんなわけで、イギリスの大学の学生食堂では、学生の平均食事時間に七分ないし八分、といった数字が出ているらしい。

この問題を論じた学者はフランス人であるから、こうしたイギリス人の食生活には、すくなくらずびつくりした様子であり、その論じかたも、やや **イ** であつた。なぜなら、フランスのばあい、食事は「事務」ではなくシンセイ<sup>C</sup>な「行事」にちかい意味を生活のなかでになっているからである。わずか、七分かそこらで、さつと食べものをかきこむイギリス人とは対照的に、フランス人は、二時間も三時間も時間をかけて、ゆっくりと食べものをかきこむ。カロリーがあればそれでよい、というのでなく、おいしくなければならぬ——それがフランスの食事文化の **ウ** なのだ。

とはいえ、このことから、 **甲** 、とはいえない。さまざまな経済統計をみても、英仏両国の「ゆたかさ」は、ほぼ同一水準にあるか、あるいはイギリスのほうがいくらか高水準にある。必要最低の食べものがあればよいという「食餌」<sup>D</sup> 的かんがえかたと、おいしいものをたのしみながら食べなければならぬ、という行事として

の「食事」のかんがえかたとのあいだにあるちがいは、「文化」のちがいであって、けっして「水準」のちがいでないのだ。じじつ、フランス人は、イギリス人の食生活を「貧困」と名づけるかもしれないが、いっぽう、イギリス人にいわせればフランス人は、食<sup>レ</sup>べることをキョウラクした結果、柔弱になったのだ、というかもしれない。「文化」、すなわち生活様式というものは、<sup>二</sup>そうした性質のものなのであって、その価値評価は多様なのである。この例でいうならば、イギリス文化のなかでは、「食」の置かれている位置は **エ** に低く、フランスの価値体系のなかでは、「食」が中枢部分とはいわないまでも、かなり高いところに組みこまれているとみてよい。ひとことで衣・食・住、というけれども、それらが生活のなかでどんなふうな価値と意味をあたえられているかは、まさしく比較文化論の領域にぞくする、とかんがえてよい。

そうした、比較論の立場に立つと、さまざまな文化現象について、興味ある事実を観察することができる。たとえばひとつの文化のなかでも、日本では、俗に、「京の着だおれ、大阪の食いだおれ」などといわれるように、地域的に、「食」に力点をかける文化、「衣」に価値体系の中心を置く文化、などを区別することができるし、また、個々の生活者の相互のあいだで、衣・食・住のどれに、どんなふうな **オ** をあたえているかによって生活スタイルの比較をすることもできるだろう。着るものや住むところには、いっこうに関心がなく、ただ、おいしい食べものだけを追求する人もあるし、また、衣・食はともかく、住居だけに力点をかける人もいる。そういう、こまかい事実を洗い出す作業はいまのところ、まだおこなわれていないけれども、個別的な事実をつぎつぎに調査してゆくことができるならば、生活類型学とでも名づけることのできる興味ある研究分野がひらけてゆくだろうと思われる。

しかし、全世界的な規模で、衣・食・住の価値体系のなかでの組まれかたを比較してみると、日本文化というのは、ずいぶん特殊な構造をもっているようにみえる。

まず第一に、日本文化のなかでは、「食」の占める位置が、かなり低い、ということが一般的にいえそうである。まえにみたようにイギリス人にとって、食<sup>レ</sup>べることは、ひとつの事務であった。それは、けっして「できごと」としての「食事」にはなりえないものであった。日本人の食生活もそれに似ている。食<sup>レ</sup>べるということは、簡素な「事務」であって、そこに快樂だの価値

だのをもちこむことに日本人はほとんど無関心であった。いや、過去においてそうであったばかりでなく、こんにちにおいてもそうである。会社の社員食堂などでの食事時間は、十分以内、ばあいによっては五分以内である。そそくさと済ませ、そそくさと立つ。まだ口をもぐもぐさせながら立つ人物もいる。ちようど、燃料切れの自動車ガソリン・スタンドでガソリンをホキウする風景とそれは似ている。からだの活動を維持するための燃料がホキウされればそれでよいので、おいしいだのまずいだのという価値評価をそこに介入させてはいけないのだ。

いや、価値評価の尺度が「食べる」ことにあてはめられるのは、日本文化のなかでは、むしろ非道德的なことでさえある。おいしいとかまずいとか、もっぱら味覚をうんぬんする人物と、どんなものでも、つつましく、黙々と食べる人物と、どちらのほう人間像として望ましいものとされるか——いうまでもなく、日本での理想的人間像は、後者のタイプなのである。

（加藤秀俊『日常性の社会学』による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ゲンゼン

- ① ゲンアンドおりに可決した
- ② それが問題のゲンキョウだ
- ③ 課題にゲンキユウする
- ④ 良い品物をゲンセンする
- ⑤ ゲンカクに悩まされる

1

B セツシユ

- ① 相手をセツトクする
- ② 締切日がセツパクしている
- ③ 委員会をセツチする
- ④ セツシヨク障害を治療する
- ⑤ セツソクを避けて慎重に行う

2

C シンセイ

- ① 侵せないセイイキ
- ② 表現がセイコウだ
- ③ 経済セイサイを加える
- ④ 臨時でなくセイギョウにつく
- ⑤ 勝利のセイサンがある

3

D キョウラク

- ① キョウアクな犯罪
- ② 神をキョウシンする
- ③ 娯楽をキョウジュする
- ④ 不幸なキョウガイ
- ⑤ 他社とキョウゴウする

4

E ホキユウ

- ① ホチョウを合わせる
- ② 犯人をホバクする
- ③ 互いにホカンし合う関係
- ④ 生命ホケンに加入する
- ⑤ イナホが実る

5

問一 空欄 ア・イ・ウ・エ・オ に入る最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

- ① おだやか
- ④ 軽やか

- ② 冷やか
- ⑤ 温か

- ③ おごそか

6

イ

- ① 曖昧
- ④ 皮肉

- ② 簡潔
- ⑤ 煩雑

- ③ 安易

7

ウ

- ① 結果
- ④ 利便

- ② 原則
- ⑤ 感想

- ③ 規律

8

エ

- ① 絶対的
- ④ 効率的

- ② 便宜的
- ⑤ 短絡的

- ③ 相対的

9

オ

- ① 優位
- ④ 意義

- ② 意識
- ⑤ 前後

- ③ 役目

10

問三 空欄 甲 に入る最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① イギリスのほうが、フランスより「高水準」である
- ② フランスのほうが、イギリスより「ゆたか」である
- ③ イギリスのほうが、フランスより「柔弱」である
- ④ フランスのほうが、イギリスより「貧困」である

11

問四 傍線部（一）「そうした性質」の意味する内容として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 対象についての考え方が国や地域によって違うこと
- ② 何に価値を見出すかは個人の自由であること
- ③ 物事の価値体系は時代によって変化すること
- ④ フランス人とイギリス人を食生活で比較すること

12

問五 本文の主旨と異なるものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。

- ① 日本では、文化の中で「食」を他のものに比べて低く位置づけている。
- ② 日本では、地域によって価値体系の重点を「衣」に置いたり、「食」に置いたりしている。
- ③ 日本では、地域を問わず価値体系において重点を置く部分が一定である。
- ④ 日本では、価値体系の尺度を「食」にもとめることを低く評価している。
- ⑤ 日本では、「食」に関する考え方がイギリス人に似ている。
- ⑥ 日本では、味覚をうんぬんする人を食通として評価している。

13

14

問六 本文の主旨と一致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 「食」についての考え方は国によって違い、それが文化の水準を現している。
- ② 日本文化のなかでは「食」よりも「衣」「住」に重点が置かれている。
- ③ 「食」にどれだけ価値を見出すかはそれぞれの国の文化の違いによる。
- ④ フランスとイギリスを評価する基準として「食」文化の違いが参考になる。

15



第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ながいあいだ、いつもひどく興味をさそわれつづけたものに、TVのいわゆる怪獣モノがありました。たいていのものをほとんど毎回欠かさずみていたんじゃないかとおもう。おもしろかったからです。おもしろかったというのは、それが今日のわたしたちにとって怪獣とは何かということを書きわめてテキカク<sup>A</sup>に語りかけてくる、ほとんど唯一のTVのプログラムだったからでした。

ウルトラマンや仮面ライダーに代表される超人たちが、わたしたちに代わって対決したのは、「地球の平和」を脅かす「敵」でした。しかし、超人たちがどのようにがんばっても、怪獣はけっしてほろびることがないんですね。倒しても倒しても、怪獣は次から次へでてくる。闘っても闘っても、超人たちは、個々の怪獣に勝つことはできても、総体<sup>二</sup>としての怪獣をほろぼすことができないんです。ただ疲労を手にするだけ。ウルトラマンだっていくども交代したし、仮面ライダーもなんとか交代しています。そうして結局、超人たちは次々と疲労して去っていったんだけど、怪獣だけは倦む<sup>う</sup>ことなく、手を替え、品を替えてのことだったのでした。

TVの怪獣シリーズは、これらのけっして敗れない怪獣の意味を、みるものに深く考えさせるものでした。けっして敗れることがないので、これからも手を替え品を替え、怪獣たちはわたしたちのまえに登場してくるだろうとおもう。怪獣たちは、しばしば個々にな変わった名をもっていますが、つまる<sup>6</sup>ところはただ一つの名をしか体現しません。すなわち、怪獣たちというのは、どんなときもたった一つ、「敵」という名だけをもち怪獣なんです。怪獣については、それが「敵」だということば、まるでわからないんですね。正体はいつだってついに不明です。

**ア** 誰かが「敵」の正体をみたといい、「敵」の本名はこうだと発<sup>おほ</sup>こうと、誰も実際にはそうした言葉を信じません。怪獣「敵」はあくまでも正体不明であることによつてはじめて、「敵」としての価値を持ち、不安な存在たりうることを、誰もがかたく信じているからです。はっきりいえるのは、怪獣「敵」はわたしたちではないということ、ただそれだけなんです。

怪獣「敵」がどこにいるか、誰にもわからない。超人たちにもわからない。だが、やつは「敵」だと誰かがささやけば、怪獣「敵」はたちまちにしてそこに出現します。「敵」がどんな姿をしているか、誰にもわからないのだけれども、やつは「敵」だ

と誰かが指させば、怪獣「敵」は、たちまちにしてそこに出現するのです。

そうして出現した怪獣を、わたしたちは超人の力にたよって追いつめるんですが、たとえ怪獣をどんなに追いつめて倒したとしても、「敵」がそれでもなおどこかにみえないままに存在しているという不安感から、わたしたちはけっして自由になれないんだ。というのも、怪獣「敵」は、あくまでもわたしたち自身のみえない「敵」にたいする不安感によって、不断につくりだされる怪獣にほかならないからなんです。

怪獣「敵」をじぶんからつくりだしては、「敵」をほろぼすために、わたしたちはさらに強力な破壊力をもつミサイルや戦闘機をつくりだします。けれども、ほろぼされればほろぼされるだけ、わたしたちの疑心暗鬼によってつくられる「敵」はいっそう強力によりがえりつづけるんです。そうした恐怖の亢進<sup>こうしん</sup>を、TVの怪獣モノは、カンショウもなく戯画化して、みるものま<sup>B</sup>えにしめすものだったのです。のちに怪獣モノのあとを引きついで格好の宇宙戦争<sup>スペースウァー</sup>モノもまた、怪獣「敵」なしには成り立たないということでは、まったくおなじ物語の構図をもつもので、やはり原型は怪獣モノにあります。

そういった物語の構図に明かされるのは、わたしたちはそれほどにも怪獣「敵」をひつようとしている、という心的な事実であり、そして、わたしたちではない「敵」をつくりださなければ、わたしたちがわたしたちである明証はどこにもない、という無残な事実<sup>三</sup>です。わたしたちは今日、じぶんたちがどんな存在か、じぶんたちがまもるべきものが何かを、もはや「敵」というガイネン<sup>三</sup>なしにはわからなくなってしまうていて、怪獣「敵」への不安、恐怖によってしか、わたしたちがわたしたちであるという実感を、どうにも維持できなくなってしまうていうことを、怪獣モノほど明確に語りつづけたものはほかになかった。

怪獣「敵」は、イ、どこにでもいるんです。わたしたちのいるところなら、どこにでもいる。ただわたしたちのあいだに、それは隠されているだけなのです。とすれば、わたしたちは、どんな隣人をも「敵」かもしれぬと疑うことから始めるほかないんです。実際、怪獣モノの怪獣たちは、いつでもまず人間として、あるいは人間のようにわたしたちのあいだにあらわれたのです。

「あやしい」とおもったら、それが怪獣「敵」なんです。とくに証拠はいらないんです。「あやしいひとをみかけたら」すぐさま通報し、ただちに人間であるが人間でない怪獣「敵」を、わたしたちのあいだから追放するのです。あとは、超人たちが怪

獣「敵」をやっつけてくれるのを、遠くからみていればいいのです。

こうした怪獣「敵」への不安、警戒が、わたしたちのころをいよいよノウミツに支配しつつあることを、怪獣モノは、むしろ淡々とみるものに語りついできました。「敵」への警戒心がつよまればつよまるだけ、それだけ「敵」というものが、わたしたちにはいつそう確かなかちでひつようとされるようになります。あたかも、どのような軍隊の防衛計画も仮想「敵」なしにはなりたないように、わたしたちの日常生活もまた、怪獣「敵」なしではなりたないかのごとき悪いユーモアは、明るければ明るいだけどこか不気味です。

わたしたちがみずから「敵」をひつようとしているかぎり、どんな超人もけつして怪獣「敵」を倒すことができないというのが、TVの怪獣モノがそれを見つづけた一人にくれたおくりものでした。それは苦いおくりものだった。英雄をひつようとする時代は不幸な時代だと、かつて詩人のブレヒトは喝破したけれども、「敵」をひつようとする時代は、不安の時代とよばれていかもしれない。怪獣モノの人気はいまもけつしてわすれられてはいず、思い出にのこるTVのプログラムがふりかえって懐かしまれるようなとき、真つ先にあげられるのは、きまつて怪獣モノ。それだけ隠された不安が、わたしたちの時代を去っていないというべきなのかもしれません。あるいはわたしたちは、じぶん自身が、人間であるが人間でない怪獣「敵」であるということにやっとなつて、わらうしかできないのでわらいながら、その実は

ウ

、といったところなのかもしれません。

「わたしたちですつて、そのわたしたちというのは誰のことですか？」そう問うたチェコの作家エゴン・ホストヴスキーの言葉をおもいだします。ホストヴスキーによれば、わたしたちというのは、「民主主義の名の下にも言うすべての人びと、みずからフランス大革命の後継ぎで、文明の擁護者であるという人びと、ラジオとTV、ジェット機と原子爆弾の発明者とジシヨウするすべての人びとです。わたしたちには、理想と迷信という信仰がゆるされましたが、それは人間の信仰じゃありません」。

もしそうであるならば、わたしたちにとって、「敵」というのは誰なのでもない。今日のわたしたちにとっての真の「敵」は、敵はわたしたちではないとおもいこんでいる、わたしたち自身にほかならない、ということですね。人間の「敵」は、理想と迷信という信仰のために、いつでも「敵」という名の怪獣をひつようとする人間なんです。

(長田弘『一人称で語る権利』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

A テキカク

- ① ナイカクを組織する
- ② 苦労はカクゴの上だ
- ③ これはカクジツな情報だ
- ④ 費用はカクジで負担する
- ⑤ ゲンカクに規程する

16

B カンシヨウ

- ① カンランシヤが好きだ
- ② 古い蒸気キカンシヤに乗る
- ③ 陸上部にカンユウされる
- ④ カンジユセイの豊かな少年
- ⑤ カンコウブツを受け取る

17

C ガイネン

- ① 花を食べるガイチュウ
- ② ガイトウ部分を探す
- ③ 事件のガイヨウを話す
- ④ カンガイ深い言葉だ
- ⑤ ガイロジュの花が咲く

18

D ノウミツ

- ① 各国のシュノウが集まる
- ② 色のノウタンが美しい
- ③ 村はノウカンキに入った
- ④ 傷口がカノウした
- ⑤ 商品をノウニユウする

19

E ジシヨウ

- ① ジシヨクは避けられない
- ② ジゼンの策を講ずる
- ③ ジキユウジソクの生活を楽しむ
- ④ ジヨウに良い食べ物
- ⑤ 人びとのジモクを集める

20

問二 空欄  ・  ・  に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

- ① やがて
- ② かと思えば
- ③ たとえ
- ④ とたんに
- ⑤ まさに

- ① ちなみに
- ② または
- ③ 引き続き
- ④ もつとも
- ⑤ だから

- ① 首を傾げている
- ② ほぞをかんでいる
- ③ 強がっている
- ④ 気味悪がっている
- ⑤ 脅おびえている

問三 傍線部 (a)・(b)・(c) の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 「倦む」

- ① 嫌になる
- ② 気になる
- ③ 傲慢になる
- ④ 気弱になる
- ⑤ いびつになる

(b) 「つまる」ところは

- ① 最初には
- ② 結局は
- ③ 実際は
- ④ 理想は
- ⑤ 専門的には

(c) 「喝破した」

- ① 真実をほのめかした
- ② 真実をごまかした
- ③ 真実をゆがめた
- ④ 真実を説き明かした
- ⑤ 真実を説いてまわった

26

問四 傍線部(二)「総体としての怪獣をほろぼすことができない」のはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～

④の中から一つ選べ。

- ① 怪獣は正体不明な存在であり、すべてを見つけたすことは不可能だから
- ② 怪獣は、わたしたちの心の中の不安から絶えず作りだされるものだから
- ③ 怪獣は、倒しても倒しても次から次にでてくるほど数が多い存在だから
- ④ 怪獣は人間の姿をして、人間社会の中に上手にかくれているものだから

27

問五 傍線部(二)「無残な事実」の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① じぶんたちの存在理由を得るために、じぶんたちではない「敵」が必要だという事実
- ② じぶんたちがまもるべきものが、すでに「敵」によって破壊されているという事実
- ③ じぶんたちをまもるためにつくった武器によって、人類が滅びかねないという事実
- ④ じぶんたちの存在をまもるためには、「敵」を全てほろぼすほかに手がないという事実

28

問六 傍線部(三)「苦いおくりもの」とあるが、なぜ「苦い」のか。説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

29

- ① 怪獣モノは、どの時代も「敵」が存在する不安の時代であったことを暗に教えてくれたから
- ② 怪獣モノは、たとえ超人であっても倒すことができない「敵」の存在を暗に教えてくれたから
- ③ 怪獣モノは、わたしたち自身が「敵」を必要とする存在であることを暗に教えてくれたから
- ④ 怪獣モノは、懐かしい過去にはもう二度と戻れないという事実を暗に教えてくれたから

問七 この文章のタイトルとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

30

- ① 怪獣モノのおくりもの
- ② 「敵」という名の怪獣
- ③ 不安の時代をのりこえて
- ④ 理想と迷信という信仰

問八 本文の内容と一致しないものはどれか。次の①～④の中から一つ選べ。

31

- ① 人間は理想と迷信のために、常に「敵」を必要とする存在であるし、「敵」を生み出し続ける存在である。
- ② 「敵」はわたしたちが自身の存在確認のために必要な存在であり、それゆえ絶えず出現する存在である。
- ③ TVプログラムの宇宙戦争モノは、常に新たな「敵」と戦うという点で怪獣モノと同じ形の物語である。
- ④ 「敵」は人間であるが人間ではないという存在であるため、見分ける場合には細心の注意が必要である。